

中世古窯から 価値ある品を発掘



発掘の様子

長頸二筋壺

長頸二筋壺は、ほぼ完全な形を残したまま出土しました。色調は、上部が赤茶色、下部が灰色、器高は二十三・六センチの壺で、高さ五・五センチ、内径五・四センチの細長い首の部分が特徴で、六段の輪状の粘土を積み上げて作られています。

何に使用された壺であるかは解明されていませんが、仏器（供え物を入れる器、仏具）の一つではないかと思われれます。

注口

注口は、形状や大きさから推測すると、小型の壺の先に付いていて、内部の液体を注ぎ出すために使われたものだと考えられます。知多半島の古窯から注口の報告例は数点しかありません。今回見つかったものは、形や製造時期などが異なるタイプのもので、

押印文様

出土した甕に三ツ巴文と三角形を組み合わせた「押印文様」（写真と図）がありました。町内の古窯から巴文などの出土例はありましたが、このような二種類の文様の組み合わせは、ほとんどありませんでした。

今回の調査結果は平成十年と十一年に調査した宮津板山C古窯と合わせて、三月中旬に発行する『宮津板山古窯址群調査報告書』社会教育課窓口で販売。価格は未定）にまとめられています。

問い合わせ先 社会教育課
☎(48)1111(内262)



押印文様



押印文様推定図

阿久比の窯業の歴史

知多半島の丘陵地帯にはたくさん古窯が見つかっています。まだ山中に眠っているものも含めれば、少なくとも三千基くらいはあったのではないかと推測されています。

平安時代の終わりころから室町時代の終わりころまで、知多半島は窯業がとて盛んな地域で、阿久比にも多くの古窯の跡が見つかっています。中世の阿久比は、農業が盛んであったほかにも、工業地帯であったことが考えられます。

今回の宮津板山F古窯址群の調査は町内で八十八基目の発掘調査になります。「壺は何に使われたのか?」「文様の意味は?」「知多で生産された窯業製品は船で全国に運ばれたとされているが、阿久比の山中から港まで、大量で重い「製品」をどのように運んだのか?」など解明されていない謎が多くあります。

文献には出てこない謎解きを、先人が残した「モノ」から推理する必要があります。皆さんはどのように思われますか。想像をふくらましてみてください。